

佐藤春夫と周氏兄弟の「相互翻訳」

李 雪

第一節 はじめに

魯迅と周作人そして佐藤春夫（1892～1964）は、日中両国の近代文学史を語る上で忘れることのできない作家である。しかしながら、彼らがかつて翻訳を通して相互理解を求めようとしたことはこれまであまり注目されてこなかった。そこで本稿は、翻訳を媒介とした周氏兄弟と佐藤春夫の交流に関する考察を行なう。

佐藤春夫は和歌山県新宮市の出身であり、中学時代から『明星』や『スバル』などに文章を発表し、生田長江や与謝野鉄幹（1873～1935）、与謝野晶子（1878～1942）らと知り合い、新詩社の同人として注目を集めていた。彼は「田園の憂鬱」「都会の憂鬱」など幻想的な作風が高く評価され、芥川龍之介、谷崎潤一郎（1886～1965）をしのぐ名声を獲得した。谷崎潤一郎との交流から、谷崎夫人千代と恋愛関係にあり、谷崎とは絶交するが、後に千代と結婚したことはよく知られている。彼の文学活動は多岐に及び、明治末期から昭和まで大いに活躍した。また、彼は生涯にわたって5回も中国の土を踏んだ。

中国における日本近代文学の初期受容を考えるには、周氏兄弟訳『現代日本小説集』を軽視することはできない。『現代日本小説集』とは、日本の近代作家15名による30編の短編小説を収めた中国語訳文集であり、1923年6月に上海の商務印書館により刊行された。この佐藤春夫の作品こそが、『現代日本小説集』に収録された小説のなかで、最大の比重を占めていた。佐藤春夫の『お絹とその兄弟』（1919）『美しき町』（1920）『幻灯』（1921）の短編集の中から「私の父と父の鶴の話」「たそがれの人間」「形影問答」「雉子の炙肉」が選ばれた。この点において注目したいのは、佐藤春夫が支那趣味愛好者の「最後の一人」（「からもの因縁」と自称し、若い頃から漢詩を愛読し、中国文学に非常に関心を持っていたということである。彼は自ら中国にかかわる小説や紀行文を創作する傍ら、中国文学の翻訳紹介にも深く関与した。中国古典文学の訳詩集『車塵集』（1929）などがよく研究されている。本論文で最も注目したいのは、彼が魯迅の作品「故郷」（1921）と「孤独者」（1925）を日本語に訳し、増田渉（1903～1977）と共訳の『魯迅選集』（1935）の出版を促したことである。

本稿では、まず日記や書簡などの資料を通して、周氏兄弟と佐藤春夫との文学上

の往来を概観する。さらに、『現代日本小説集』に収録された「雉子の炙肉」に着目し、この作品を中国の新文学の創出との関係から分析・検討することを試みる。また、魯迅作品「故郷」の佐藤春夫の翻訳・紹介をめぐる受容の諸問題を視野に入れながら、翻訳を媒介とした日中近代文学交流のプロセスを明らかにしたい。

第二節 周氏兄弟と佐藤春夫の交流の概略

まずは、日記、書簡などを通して、周氏兄弟と佐藤春夫との交流を概観してみる。

* 周氏兄弟と佐藤春夫の関係略年表

年月日	関連者	事 項
1919年4月	周作人	『お絹とその兄弟』（佐藤春夫）購入
1921年6月30日	周作人	「雉子の炙肉」訳出。（日記「下午訳佐藤春夫小篇了寄家信又伏園函」）
1921年7月6日	周作人	「雉子の炙肉」付記
1921年7月9～10日	周作人	「雉子の炙肉」訳掲載『晨报』（第7面）
1921年8月29日	魯迅	周作人宛「『日本小説集』目録はこれではなかなかよいが、たとえば加能など数人の数編は省いてもよいようだし、また佐藤春夫はもう一編別のを加えてしかるべきではないかと思われる。」
1921年10月	周作人	『美しき町』（佐藤春夫）購入
1921年11月	周作人	『幻燈』（佐藤春夫）購入
1922年1月5日	周作人	「形影問答」訳出。（日記「下午訳佐藤春夫小説了寄伏園函。」）「形影問答」付記
1922年1月8日	周作人	「形影問答」訳掲載『晨报副鰲』
1922年6月	周作人	『南方紀行』（佐藤春夫）購入
1922年12月30日	周作人	「私の父と父の鶴の話」と「たそがれの人間」訳出。（日記「連日訳佐藤春夫小説成二篇」）
1923年6月	周氏兄弟	共訳『現代日本小説集』刊行、附録で佐藤春夫を紹介

1923年11月	周作人	『我が一九二二年』(佐藤春夫) 購入
1923年12月	周作人	『剪られた花』(佐藤春夫) 購入
1927年1月	周作人	『退屈随筆』(佐藤春夫) 購入
1931年	佐藤春夫	<i>The Tragedy of AH Qui</i> (英訳の「故郷」も収録) 購入
1931年	佐藤春夫	魯迅の短篇集2巻を購入
1931年11月11日	魯迅	詩集『魔女』(佐藤春夫) 購入
1932年1月	佐藤春夫	「故郷」訳と原作者紹介を発表(『中央公論』)
1932年1月5日	魯迅	増田涉宛「佐藤様は「故郷」訳文の後記にも一生懸命紹介して居りましたがどうなるでしょう。」
1932年12月19日	魯迅	増田涉宛「井上氏訳の『魯迅全集』が出版して上海に到着しました。訳者からも僕に一冊くれました。あなたと佐藤先生の訳したものを対照しなかつたらしい、実にひどいやりかただと思ひます。」
1933年3月1日	魯迅	増田涉宛「佐藤先生に非常に感謝します。面会したら此の微意を伝えてください。」
1933年4月13日	魯迅	内山完造宛「佐藤先生も増田様も私の原稿ために大に奔走なさるだろー(中略)殊に佐藤先生に。私は実に何と云って感謝の意を表わすべきか知らないほど感謝しております。」
1933年11月14日	魯迅	「絵入みよ子」(佐藤春夫) 購入
1934年3月27日	魯迅	佐藤春夫に『北平牋譜』を贈呈(日記「『北平牋譜』一部を佐藤春夫君に送る。」)
1934年7月	魯迅	『陣中の豎琴』(佐藤春夫) 購入
1935年10月	佐藤春夫	『魯迅選集』(増田涉共訳) 刊行
1937年2月	佐藤春夫	(編集顧問)『大魯迅全集』(改造社) 刊行
1938年2月	周作人 佐藤春夫	北京で面会
1940年7月	佐藤春夫	編訳『支那文学選』(「ふるさと」収録) 刊行
1941年4月17日	周作人 佐藤春夫	東京で面会

第三節 周氏兄弟による佐藤春夫の紹介と翻訳

(一)『現代日本小説集』における佐藤春夫に関する紹介

『現代日本小説集』の附録である「作者に関する説明」における佐藤春夫の項では、主に友人である芥川龍之介と谷崎潤一郎による佐藤春夫文学についての評論を抄訳する形式で紹介されている。次の通りである。

佐藤春夫は1892年に生まれ、現代の詩的な小説家である。芥川龍之介はこういう「佐藤春夫は詩人なり、されば作品の特色もその詩的な点にあり。佐藤の作品中、道徳を諷するものなきにあらず、哲学を寓するもの亦なきにあられど、その思想を彩るものは常に一脈の詩情なり。佐藤の詩情は最も世に云う世紀末の詩情に近きが如し。繊婉にしてよく幽渺たる趣を兼ね」。(1)

彼の作品は、また空想に富んでいる。谷崎潤一郎は彼の「病める薔薇」に序を作り、かつて「予の考へを以てすれば、空想に生きるもののみが藝術家たり得る資格があるのである。藝術家の空想が、いかに自然を離れて居ようとも、それが作家の頭の中に生きて動いて居る力である限り、空想も亦自然界の現象と同じく真実の一つではないか。空想を真実と化し得てこそ、始めて藝術家としての生きがひがあると云ふものである」と言った。(2)

すでに言及したように、『現代日本小説集』に収録される前に数多くの訳文が新聞や雑誌に発表されていた。佐藤春夫の作品を翻訳の順番に従って並べると、「雉子の炙肉」「形影問答」「私の父と父の鶴の話」「たそがれの人間」になると考えられる。この4編はいずれも佐藤の代表作とはいえないが、「詩的な小説家」としての一端が垣間見える作品だと思われるので、特に「雉子の炙肉」に注目してみたい。

「雉雞的焼肉」と題した「雉子の炙肉」の中国語訳が掲載されたのは1921年7月9～10日の『晨报』であって、同時に掲載されたのは2年後に発行の『現代日本小説集』には収録されていない訳者付記である。次に、1921年7月6日の日付の「雉子の炙肉」の訳者付記を見てみよう。

佐藤春夫 1891年生まれ、「田園の憂鬱」が最も有名である。この1篇は小説集『お絹とその兄弟』から訳出した。作中には理解できないところがあり、H・S氏にご示教頂いた。心より感謝を申し上げる。(3)

ここで、注目したいのは「作中には理解できないところがあり、H・S氏にご示教頂いた、心より感謝を申し上げる」というところである。これまでの研究で言及されてこなかったが、「H・S」とは「佐藤春夫」の名字のアルファベット表記だと推測できる。翻訳者の周作人は原作者の佐藤春夫の示教を受けたのであろう。ただし当時、周氏兄弟は佐藤春夫とはまだ面識がなかったので、いったいどのような方法で相互に意思を通じ合ったのかは現在のところ不明である。さて、「雉子の炙肉」とはいったいどのような作品で、周作人が精力的に工夫して翻訳した意図はどのようなものなのか。これらの問題を解明するために、まず佐藤春夫の「雉子の炙肉」についてさらに考察する。

(二)「雉子の炙肉」―漢文語録体から現代日本語訳へ

「雉子の炙肉」という作品は、1916年11月12日の『読売新聞』の「日曜付録」に掲載された短編である。この作品は『論語』の「郷党第十」から取材し、孔子と子路の問答を題材にしている。一般的に原作の筋や内容をもとに改作することを翻案とするなら、この作品も小説の形式で『論語』を再現した翻案と見なすこともできる。周知の通り、『論語』とは、孔子の死後、孔子と高弟の言行を、弟子達が記録した書物である。戦国時代初期から編纂が始まり漢代になって成立した『論語』は、『孟子』『大学』『中庸』と併せて儒教における「四書」の一つでもある。「仁」を中心とする孔子およびその一門の思想が語られ、儒家の中心経典として中国の伝統思想の根本となった。日本へは応神天皇の代に伝来したといわれ、早くから漢学を中心とされた。

『論語』は512の短い文が全20編で構成されている。編の名は各編の最初の2文字または3文字を採ったもので、以下に示した通りである。

学而第一（がくじ）
為政第二（いせい）
八佾第三（はちいつ）
里仁第四（りじん）
公冶長第五（こうやちょう）
雍也第六（ようや）
述而第七（じゅつじ）
泰伯第八（たいはく）
子罕第九（しかん）

郷党第十（きょうとう）
先進第十一（せんしん）
顔淵第十二（がんえん）
子路第十三（しろ）
憲問第十四（けんもん）
衛靈公第十五（えいれいこう）
季氏第十六（きし）
陽貨第十七（ようか）
微子第十八（びし）
子張第十九（しちょう）
堯曰第二十（ぎょうえつ）

「雉子の炙肉」の冒頭は、次の二つの引用文である。

その弟子むかふの岸に到りしにパンを攜ふること忘れたりイエス彼等に曰けるは戒心してパリサイとサドカイの人の麴酵を慎しめよ弟子たがひに論じて曰けるはパンを攜へざりし故ならん……云々

馬太傳第十六章

色斯舉矣。翔而後集。曰。山梁雌雉時哉。時哉。子路供之。三嗅而作也。

論語郷黨第十⁽⁴⁾

佐藤春夫は、二つの文がそれぞれ新約聖書のマタイ伝である「馬太伝」と『論語』からの引用であると明確に示している。

まずは『論語』からの引用をめぐって議論を進めたい。「郷黨第十」とは『論語』のなかで孔子の衣食住や礼儀について中心に述べた1編である。次は「雉子の炙肉」からの引用である。

あの橋の上で見た奴一雌を同じことならば差し上げたいと考へた子路は、あちらこちらと捜し求めた末に、一羽の雌の雉子を得て、いそいそと家に歸つた。さて自分でその胸の肉を割き、自分でこれを炙り、自分で皿に盛り、さうして師の夕餉に間に合せやうと急ぎで、自分でこれを携へて運んだ。孔丘は皿に盛られた雉子の肉を見て、常に變らぬ温かい顔を子路にむけた。

「由よ、これは又ない馳走であつた。」

併し孔丘は食はうとはしない。但、食はない時の禮儀に依つて、皿を把り上げて、しばらく炙肉のにほひを嗅いだ。

「併し、由よ、私は既に、見られる通りの老體ぢや。」

さう言つて、孔丘は、再び炙肉のにほひを嗅いだ。

「されば、許してくれよ、私は食べたくももう齒がないのだから。」

さう言つて、淋しげに笑うて、三度炙肉を把り上げて三度炙肉のにほひを嗅いだ。これは折角のご馳走をこつたる時の禮儀であつたからである。

「由よ。まことによい香がするぞ。」

最後にさう言つた聲は、何故か、鼻に涕が流れ込んだ人の聲のやうであつた。でなければ、孔丘はこの朴訥な贈り物の香にむせたのであつたらう。

(中略)

「或人の言うところを、他の人は、決して言うた人の心どほりには聞かない。併し人人よ、それに就て立腹してはならない。」⁽⁵⁾

小説の「雉子の炙肉」を語録体の『論語』と比較してみると、両者の差異が明らかになる。文体の面において、題材とされた『論語』の凝縮された文体は小説化した「雉子の炙肉」の文体とは大きく異なり、印象が違う。

佐藤春夫は豊富な漢文知識を持っており、『論語』を確実に読み取った上で、ユーモアのセンスと風刺の技巧を生かし、孔子の神聖な「仮面」をひきはがした戯作を自由に作り上げた。作品における孔子像は、中国における神格化された孔子とは異なっていて、「人間性」に満ちた平凡な人間のイメージとして造型されているといえる。とりわけ、結末の2行「或人の言うところを、他の人は、決して言うた人の心どほりには聞かない。併し人人よ、それに就て立腹してはならない」は、佐藤春夫が付け加えたモラルである。そのモラルは孔子が高弟に授けた教訓ではなく、佐藤春夫が孔子に対して揶揄する形で述べた教訓である。

このように、佐藤春夫は『論語』に自分の文章や道德観を付け加えたわけだが、このことと関連して、「論語の面白さ」⁽⁶⁾ という文章のなかで、次のように語っている。

語が簡潔で意の深長なのはすべての古人の文章の妙味であつて必ずしも論語ばかりの特色でもない。しかし、あの淡々として澄明に冴えた文致は、秋江の水天の浄として憐れむに堪えたものに接するの思のあるのは古代の支那の文章特有の美点であらう。さうして論語に於てその極致を見る。僅々十数字乃至時には数十字の間で抑揚頓挫の妙を極めた手法は多くその類を見出し難いもので

あらう。

この引用中の「特有の美点」や「抑揚頓挫の妙」などの言葉から、彼が『論語』を高く評価していることがわかる。そして、それにとまらず、この佐藤春夫による「論語の面白さ」という文章は『論語』論として「雉子の炙肉」の解釈に重要なヒントを与えている。

上の引用に続き、佐藤春夫は「雉子の炙肉」の典拠である「郷党第十」の最後の節を例として取り上げている。次のように原典を引用し、書き下しを加えた後に、内容を解説している。次に引用する。

目につきやすいほんの一、二の例を挙げてみるならば、郷党第十の最後の節、

色斯矣矣翔而後集曰山梁雌雉時哉時哉子路共之三嗅而作（色みてここに舉り翔りて後に集る曰く山梁の雌雉時なる哉時なる哉と子路之に共せしに三たび嗅ぎてたらぬ）人の顔色を見てまづ高く飛び上がつて慎重に様子を窺つた後やつと安心して再び地上に下りて来た雌雉を見て孔子が時機を明察するこの鳥の本能の鋭敏を讃歎し人の進退もかくありたいと教へるのを聞いた子路が試みに雉にものを与へてみると雉はこれを用心ぶかい三度嗅いでゐたが終に飛び去つたといふ意味である。

（中略）

子路共之以下を、子路之に。共（共に同じ）す……と読まずに子路之を供す……と読んで、子路が調味した雉を孔子に供したとするのは「時哉時哉」といふ語の真意を子路が解しないで、雉の味のよい時になつたと師が云つたと解くもので、この読み方にも一種の悲しい滑稽が感ぜられる皮肉な面白さがないでもないが、正しくは子路が雉に餌を供してみたら……といふのであるらしい。その方が無理なくて腑に落ちやすい。それ故この一節は孔子が折にふれ時にのぞんで眼前の一事一景をみな教訓の資料とした一例を示すものと知るべきであらう。

ここで重要なのは、最後の「子路共之三嗅而作」についての解釈が「雉子の炙肉」のストーリーの内容と異なる点に注目すべきである。実際、この1節は「論語」のなかでもっとも難解なところだといわれる。中国では、魏の何晏から宋代の朱熹にかけ、この1節をめぐるさまざまな解釈が行われてきた。佐藤春夫自身も「この読み方にも一種の悲しい滑稽が感ぜられる皮肉な面白さがないでもないが、正しくは子路が雉に餌を供してみたら……といふのであるらしい。その方が無理なくて腑

に落ちやすい」と述べているように、一般的な解釈を指摘している。しかし、彼は「一種の悲しい滑稽が感ぜられる皮肉な面白さ」を持つ読みを使って、「雉子の炙肉」の肉付けをしているのである。先に引用したように、周作人は「雉子の炙肉」の訳者付記において、「作中には理解できないところがあり」と書いていたが、恐らく佐藤春夫のこの部分の解釈が周作人の「理解できない」ところにあたるのであろう。周作人は佐藤春夫から「この一種の悲しい滑稽が感ぜられる皮肉な面白さ」がある読み方についての説明をもらった後でこの作品を訳出したのではないかと筆者(李)は推測している。

(三)「雉子の炙肉」に見える『聖書』(西洋)と『論語』(中国)

本節では「雉子の炙肉」冒頭の最初の引用、すなわち『聖書』からの引用をめぐる議論を進めたい。第一章で述べたように、1910年代後半、陳独秀、魯迅、周作人は新文化運動という文化啓蒙運動を推進した。それは、封建社会を支える思想である儒教の批判、科学と民主の重視、文学改革などを中心とする啓蒙運動であった。当時の中国社会では一時的に民主と科学が標榜され、儒教イデオロギーが批判された。

そのうち、すでに言及した胡適は、1917年1月号の雑誌『新青年』に「文学改良芻議」をアメリカから寄稿し、難解な文語文を廃し、口語文にもとづく白話文学を確立しようと提唱していた。理論面で文学革命を推進していく胡適はこの「文学改良芻議」のなかで、

古人の模倣をしない。

文法を重んじる。

病もない呻吟をしない。

陳腐な言葉を用いぬように努める。

典故を用いない。

対句を使わない。

俗字俗語を避けない。(7)

と主張した。

次に、『小説月報』の12巻1号に発表した鄭振鐸(1898～1958)と周作人の文学評論に注目したい。『小説月報』は後に『現代日本小説集』の出版元となった商務印書館によって1910年に創刊された。最初は「鴛鴦蝴蝶派」といわれる遊戯的な小説

の類を載せていたが、1921年に文学研究会が結成されるとともにその内容が一新し、実質上の機関誌になった。編集長茅盾（1896～1981）や編集者の鄭振鐸らは、特集や増刊号も刊行し、外国文学の翻訳紹介と中国国内の新文学作品の批評に力を注ぎ、新文学運動に大きな役割を果たした。鄭振鐸は中国の文学者の責任を次のように概説している。

現在、中国の文学者には二つの重大な責任がある。一つは中国の文学を整理すること。もう一つは世界の文学を紹介することである。⁽⁸⁾

このように、鄭振鐸は中国の伝統的な文学を「整理する」必要性を世界文学の紹介とともに強調した。周作人も同号に「聖書と中国文学」（「聖經與中國文學」）という文章を載せていた。

この2、3年来、文学革命の主張は社会にすでに優位を占めている、破壊した後、建設すべきである。

（中略）

われわれは新しい一面に注意を払ったが、つまり『聖書』の精神と形式は、中国の新文学の研究および創造においてはいかなる影響を与えるかということに注意を払ったのである。しかしながら古い面についても今時の欧州の『聖書』に関しての文学的な考証研究は、その多くのところが中国の固有文化を整理する方法として参考になる。新約と旧約の内容が中国の経書と似ている：『新約』は『四書』で、『旧約』は『五経』である。⁽⁹⁾

この引用で特に注目すべきなのは、周作人が西洋の古典である『聖書』と中国古典である『論語』の内容上の類似性を見出していることである。さらに、近代に欧州が聖典の『聖書』の文学的な考証研究を行うことによって文学を改革してきたことを理解し、中国古典を研究するによって中国文学を改革していく可能性と重要性を示唆している。このような文脈で、彼は中国古典を題材にして極めて自由に書き上げた佐藤春夫の「雉子の炙肉」に目を向けていたのであろう。

そもそも周作人はなぜ西洋の文学改革に大きな役割を果たした『聖書』に目を向けたのであろうか。実際、日本留学の1909年4月、周作人は、築地にある日本聖公会系のキリスト教主義学校（ミッションスクール）である立教大学に入り、ギリシア語の勉強を始めた。そして、立教学院系列の「三一神学校」でギリシア語の「福音書」の講義を聴くようになった。『新約聖書』の『四福音書』をギリシア語から

中国語に翻訳しようとひそかに志したのもその頃のことであった。

ミカエル・ウスティノフは、『翻訳—その歴史・理論・展望』（2008）のなかで、「聖書のテキストに向き合わずして翻訳は語れない。信者であろうがなかろうが、少なくともそれははるか昔より、人類史上最も壮大な翻訳の試みの対象であり、また今なおそうあり続けている。現在、聖書は二二三三の言語に訳されている。これに匹敵するテキストで、これほど多くの言葉に姿を変えているものは他にない。言語の多様性に加え、同一言語における翻訳の多様性もある」⁽¹⁰⁾と聖書の翻訳について述べている。このウスティノフの見解を念頭におけば、次のような推測も可能かもしれない。おそらく、周作人は次のように考えていたのであろう。『論語』には中国伝統文化の知恵が宿っており、時代に応じて受け継ぐべき古典として読み直すことが可能なのではないかと。周作人が「雉子の炙肉」を選んで訳したのは、この小説が、『新約聖書』と『論語』の両方を原典とするものであるためであろう。周作人は「雉子の炙肉」を翻訳することによって、古典の継承とともに変革をも志したのである。

この推測に関して、周作人は文芸雑誌『語絲』（第1号、1924年11月）に、「生活の芸術」（「生活之藝術」）を發表し、次のように指摘していることに注目したい。

中国で今日切実に必要とされるものは、一種の新しい自由と新しい節制である。中国の新文明を建設することは、千年前の旧文明を復興させることでもある、また西洋文化の基礎であるギリシア文明と相合一することでもある。⁽¹¹⁾

この引用を念頭に置きつつ、周作人の翻訳と佐藤春夫の原典について論じたい。周作人は、「雉子の炙肉」の冒頭を、次のように訳している。

門徒渡到那邊去，忘了帶餅。耶穌對他們說，你們要謹慎，防備法利塞人和撒都該人的酵。門徒彼此議論說，這是因為我們沒有帶餅罷。耶穌看出來，就說，你們這小信的人，爲甚麼因為沒有餅彼此議論呢？你們還不明白麼？……我對你們說的話，不是指着餅說的，你們怎麼不明白呢。你們却要防備法利塞人和撒都該人的酵。門徒這纔明白他說的，不是叫他們防備餅的酵，乃是防備法利塞人和撒都該人的教訓。一馬太福音第十六章。⁽¹²⁾

再び、原作の「雉子の炙肉」の冒頭の1節を挙げると、次の通りである。

その弟子むかふの岸に到りしにパンを攜ふること忘れたりイエス彼等に曰け

るは戒心してパリサイとサドカイの人の麴酵を慎しめよ弟子たがひに論じて曰けるはパンを携へざりし故ならん……云々

馬太傳第十六章 (13)

両者を比較してみると、周作人が翻訳した引用文の方が量的に増えていることがわかる。それぞれの引用文の下線部に注目したい。日本語原文の末尾「……云々」と省略されている内容を、周作人は中国語に省略せずに訳出している。つまり、周作人は佐藤春夫の採った「馬太伝」における節をそのまま翻訳したばかりか、省略した節をも補完的に翻訳して掲げたことがわかる。完訳の『新約聖書馬太伝』（米国聖書会社、1912）を参照してみると、佐藤春夫に省略されていて周作人に補足的に訳されたのはおよそ次の範囲に相当する。

イエスこれを知て曰けるは信仰うすき者よ何ぞ互いにパンを携へざりしを論ずる乎未ださとらざるかパリサイとサドカイの人の麴酵を慎しめるはパンにつきて言るに非るを何ぞ悟らざる是において弟子に於てその麴酵にはあらでパリサイとサドカイの人の教を謹しめと言るなるを悟れり（第16章5～12節）⁽¹⁴⁾

こうして見るとわかるように、佐藤春夫は『新約聖書』の一部「馬太傳第十六章」を小説の冒頭に引用したが、周作人は、この小説を翻訳するにあたって、該当箇所を『新約聖書』に探り、その引用の典拠を追究していたのであろう。そして、すでに述べたように、彼が留学中に立教大学などでギリシア語を学んでいたことを考慮すれば、彼は引用の典拠としてギリシア語原典を参照していた可能性もある。

さらに、周作人は佐藤春夫の原作にとどまらず、補足的に訳し加え、その本来の様子を再現させるように工夫したのである。翻訳者としての周作人にはこうした「起点文化」を重視する翻訳者の姿勢が窺える。

周作人の翻訳に対する姿勢について付け加えておけば、「雉子の炙肉」の翻訳は現代日本語から現代中国語への翻訳であるが、そもそも原作が中国古典の翻案「雉子の炙肉」であったために、結果として『論語』の古典中国語が現代中国語へ置き換わることになったことも見逃せない。このように、同一言語内の翻訳の実現を意味している。次のような会話文の翻訳はその典型例である。

「すべての事は時節ぢや。時節ぢや。今の橋の上の雉子を見たか。」

「はい、見ましてゐいます。」⁽¹⁵⁾

「一切的事都是時節呀，時節呀。你看見剛纔那橋上的雉雞麼？」
「是，看見了。」⁽¹⁶⁾

周知のように、『論語』は宋学が特に四書をテキストとして重視したことから、科挙の出題科目にもなり、約2000年間学問の主要科目であった。近代文学の作家でもあり近代日本文学の翻訳者でもあった周作人は、日本の小説としての「雉子の炙肉」の文章表現をごくわかりやすい現代中国文（白話文）に翻訳することができた。これによって、長い封建時代を通じた聖典であった『論語』は中国の伝統的な文語文から言文一致体に変換されることが実現したといえる。

佐藤春夫の「雉子の炙肉」の翻訳は、当時の中国の文化的コンテキストに即して読むべき作品だと思われる。この作品は文体上も内容上も儒教の絶対的な権威を脱却しようとする文学革命の方向と共通するものである。原典である『論語』が佐藤春夫の言葉で自由に語り直されているからである。そして、文学革命の推進者であった周作人は、儒教中心の伝統思想を打破するために、完全に儒教的要素を排除するよりも、むしろ「孔子」を聖人から一人の人間に変容させようとした。いいかえれば、「人間の文学」を創出しようとした翻訳者の姿勢が作品の選択と翻訳によって示されている。

第四節 佐藤春夫による魯迅文学の紹介と翻訳

（一）「故郷」の翻訳とその受容

佐藤春夫は「からもの因縁」のなかで、彼自身と中国との深い関係を次のように語っている。

事改めて断るまでもなく、自分は無論支那學者ではなく所謂支那通でもなく、また支那文學研究者でさへもない。もし自分に何か強いて支那の二字のついた肩書をつける必要があると假定したら、まあせいぜい支那趣味愛好者ぐらゐなところかも知れない。さうしておそらくはその最後の一人であらうかと思ふ。

自分の支那雑記は自分の文学生涯のたもとぐさなのかも知れない。それならば、自分は支那といふ文學の着物を着て生活してゐることになるのか知ら。

その頃、一といふのは明治の末年から大正の初期にかけて支那の文物に對して文壇で多少の關心を持つてゐたのは、亡友芥川龍之介と自分ぐらゐであつたらしい。博學多才な芥川は少年時代から支那文學を愛讀する外にわが國の古典

にも通じ歐州の近代文學にも精通してゐたから、自然、比較的精通せずまた當時一向流行しなかつた支那文學などをあまりふりまはす要もなかつたけれど、自分は半人前の英語と半人前の漢文の讀書力とを合わせ極く幼稚な支那文學の紹介をしてゐた。

要するに自分は無意識に或は半意識的に一種の啓蒙の仕事をしてゐたのであった。(17)

この引用を理解するために補足しておけば、佐藤春夫が同時代の中国文学にも関心を持つようになったのは、彼がもともと伝統的な漢学の雰囲気の中で成長し、中国文化について個人的な親近感を抱いていたという要因が働いたからである。また、中国近代文学が1930年代から海外に本格的に翻訳・紹介されるようになったこととも関係していると考えられる。

このように、「支那趣味愛好者」であつた佐藤春夫は、1932年に魯迅の代表作ともいえる短編小説「故郷」を日本語に訳し、日本に紹介したが、このことは彼の「趣味」を考えれば自然なことだったといつてもよい。

ここで佐藤春夫が翻訳した魯迅の「故郷」について基本的な事実を確認しておきたい。1923年8月に北京の新潮社より刊行された魯迅の最初の創作集『呐喊』に収録された「故郷」は、後に日本の国語の教科書などにも採用され、魯迅の作品のなかでも、日本の読者にもっとも親しまれている作品となった。作品に描かれた主人公の生家の没落、故郷からの退去は、魯迅本人の経験がもととなっているといわれる。当時の社会に残存する封建的な身分慣習に対する悲痛な慨嘆とともに、次代への希望と決意が込められている作品である。

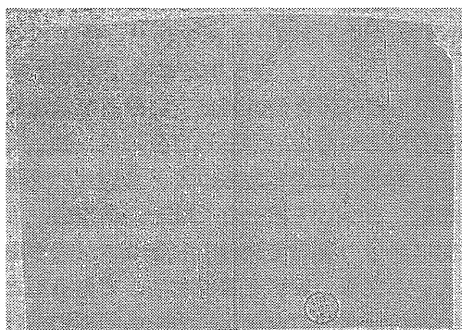


図1 佐藤春夫訳「故郷」の自筆原稿

佐藤春夫記念館『芥川龍之介・佐藤春夫展』新宮市立佐藤春夫記念館、1999年、33頁。

佐藤春夫は中国語が堪能ではなかったため、翻訳の際に、*The Tragedy of AH Qui* に収録されている「故郷」の英訳をも参考にした。その経緯については、次のように回想されている。

わたくしは早速、文求堂にかけつけて、店頭にあつた魯迅の短編集二巻を手に入れて帰り、それから英文と対照して翻訳したものである。由来わたくしの英語は半人前だと自分で思つてゐる。さうしてわたくしの漢文の読書力も半人前を以て自認している。この二つの半人前を合してわたくしは一人前の(?) 翻訳をした。魯迅のは現代文だから漢文の読み方ではわからぬ字も無いではなかつたが英訳のおかげで大に助かつた。それに魯迅の文章は現代の中国文のなかでは漢文的なものの多い文章のやうに思へて、この点でもそれほど難解ではなかつた。(18)

佐藤春夫は、魯迅の「故郷」の翻訳を『中央公論』に発表した際に、訳文の後記で魯迅の翻訳活動に言及し、「作家としての傍、日独露等の文学の翻訳紹介を怠らず不断的努力の結果中国近代文学の父たりまた母たる使命を完全に果し得た」(19) と、魯迅の多岐にわたる翻訳業績を高く評価した。

後に、佐藤春夫は、魯迅の作品を増田渉と共訳で日本に紹介し、岩波書店の文庫本『魯迅選集』の出版を促した。『魯迅選集』に収録されている作品と

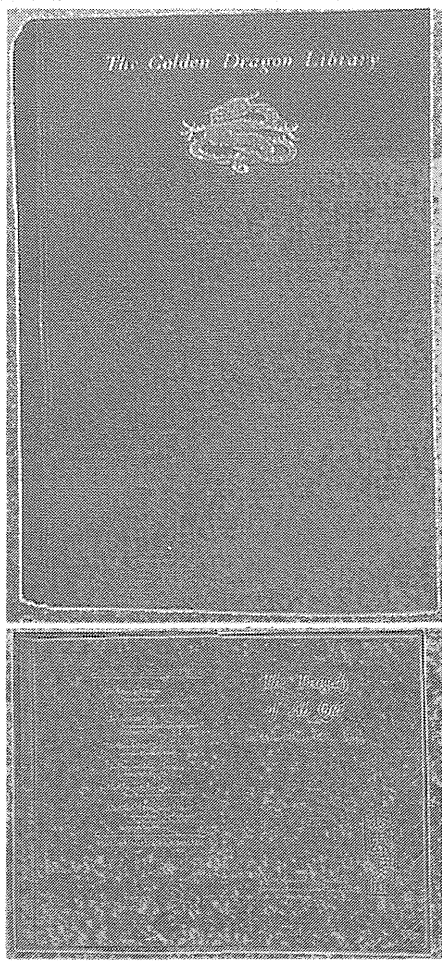


図2 *The Tragedy of AH Qui and Other Modern Chinese Stories*.

(London : Routledge & Sons, Ltd, 1930) 表紙・目次 新宮市佐藤春夫記念館所蔵

その原題を次に挙げる。

『魯迅選集』	原題
・孔乙己（小説）	孔乙己
・風波（小説）	風波
・故郷（小説）	故郷
・阿Q正傳（小説）	阿Q正傳
・家鴨の喜劇（小品）	鴨的喜劇
・石鹼（小説）	肥皂
・高先生（小説）	高老夫子
・孤獨者（小説）	孤獨者
・藤野先生（回憶）	藤野先生
・魏晉の時代相と文學（講演）	魏晉風度及文章與藥及酒之關係
・上海文藝の一瞥（講演）	上海文藝之一瞥
・附 魯迅傳	

あとがきによると、「故郷」と「孤獨者」が佐藤春夫の訳で、あとは全て増田渉の訳であるという。

佐藤春夫は巻頭において、魯迅の写真を付して、解説もしている。

魯迅先生の肖像は本國でも珍しいものとされてゐる。

政治的迫害の手を通れるためには肖像が流布しない方が便利だからだと云ふ。

ここに掲げられたものは譯者等が最近のものをとの乞を容れて特に與へられたものであるが、最近といつても一昨年 of 撮影ださうである。

わが二葉亭の風貌と一味相通ずるものを見るのはその文學と照應して一奇を覺えるではないか。(20)

上記の引用と第二節で挙げた関係年表から推察できるように、増田渉を通して、佐藤春夫は魯迅の近況をよく把握していたといつてよい。つまり、魯迅文学の翻訳紹介の際に、1930年代の中国において、国民党を厳しく批判し、左翼文壇の旗手となった魯迅が「政治的迫害」を被っていることを知っていたのである。

なお、引用中で言及されている「二葉亭」とは日本近代小説家である二葉亭四迷（1864～1909）である。言文一致体で書かれた彼の代表作『浮雲』は日本の近代小説の始まりを告げた作品だといわれる。また、ロシア文学の翻訳も多く手がけ、ツ

ルゲ・ネフの「あひゞき」「めぐりあひ」は特に有名で、自然主義作家へ大きな影響を与えた。佐藤春夫が二葉亭四迷と並べて魯迅を日本の読者に紹介したのは、魯迅を「中国文壇の二葉亭四迷」と位置づけ、そのイメージを伝えようとしたからであろう。

ここで佐藤春夫の翻訳観について述べてみたい。佐藤春夫は後に「故郷」に言及するとともに、次のように自らの翻訳観を語っている。

わたくしが「故郷」を訳してみる気になつたのは、勿論その作品に感心したためであつたがこれによつて自分の半人前の読書力を少しでも養ひ、同時にこの大きな風格を持った作家の作風から学びたいと思つたからである。翻訳とはわたくしにとつては精読を意味することで、ポツリポツリと訳出して行くことは自分のなかへ何か摂取してゐるやうな楽しみがあつて、わたくしは敢てその労の多いのを惜しまない。労から云へばわたくしの場合創作よりもよほど骨が折れるのだが。⁽²¹⁾

佐藤春夫はこの作品が大いに気に入った理由を語り、次のように高く評価する。

「故郷」は中国古来の詩情（それをわたくしは異常に愛している）が、完全に近代文学になつてゐるやうな気がしたからである。中国古来の文学の伝統が近代文学として更生してゐるといふのか、ともかくもさういふ点が、日ごろわが国の近代文学が古来の文学と全く隔絶してゐるかのやうに見えるのを不満としてゐたわたくしに、「故郷」を訳して学ばうといふ気を起させたのであつたと思ふ。それからあの少年時代を取扱つた作品には当然、童話のやうな楽しい世界がある。わたくしはすべての童話のやうな世界が好きなのである。⁽²²⁾

この引用から、日本の近代文学が「古来の文学と全く隔絶してゐる」ことに対して失望感を抱えていた佐藤春夫の態度がわかる。彼は日本近代文学と中国近代文学を比較して評したことを通じて、魯迅文学にまだ残っている伝統的な要素を見出して、それを中国の近代文学の優れたところとして肯定的に捉えている。つまり、「童話のやうな」世界こそが佐藤春夫自身が求めていた心象風景なのである。欧米化されつつある日本の社会のなかにおける東洋文人としての寂しさが彼の心底に潜んでいたのであろう。

このことと関連して、魯迅「故郷」を訳した佐藤春夫は、後に「ふるさと」というタイトルで実家の和歌山県新宮市をめぐる物語を創作し、同じく「故郷」の日本

語訳を載せた雑誌『中央公論』（第51巻第5号、1936年5月）と『東陽』（第2巻第2号、1937年2月）に発表したことに触れておきたい。「ふるさと」は「第1章 浮沈」「第2章 故園の落葉」「第3章 こがらし」によって構成されている作品である。作中で描かれているのは、近代化に伴う生臭いともいえる金銭欲や実利が跋扈する世界であり、力なく抗う老父や遠く離れた東京で文筆を業とする者の姿である。文筆を業とする者の姿は西洋近代文明と東洋伝統文化の挟間に葛藤する知識人たちの姿にも重なっている。こうして見ると、魯迅「故郷」の翻訳紹介が佐藤春夫自身の小説創作にもたらした影響は少なくないといってもよい。

（二）翻訳の行方―日中戦争期における「故郷」の改訳

前述の通り、佐藤春夫は隣国の中国に東洋の伝統文化を求めようとしたと考えられる。ゆえに、近代中国の文化より、むしろ杜甫や李白がいた古代中国への憧れを持っていた。このことを念頭におけば、佐藤春夫が、魯迅の小説のなかでもっとも感心したのは作品における月光と少年の表象であると述べていることは興味深い。「魯迅文学入門指南」（1937）において、佐藤春夫は次のように述べている。

一體魯迅の小説を一讀して誰しも直ぐに氣のつくのは、常に好んで月光と少年が描かれてゐない事がないといふ點である。（中略）まるで月光と子供この二つがなしでは彼は作ができなかつたかのやうな觀があるのが奇妙である。…月光を愛するあまり、好んで月光を描いたのであらうし、子供も多分大好きだつたのではあらう。しかし、自分は、月光を魯迅文學の民族的傳統の象徴、少年の方を民族的希望の象徴と見てゐるのである。（中略）思へば月光は李白以來支那文學の一傳統であつた。思ふに、靜かな月下の氣分が阿片を好む支那人の體質に適するものがあるのではあるまいか。⁽²³⁾

しかし、「靜かな月下の氣分が阿片を好む支那人の體質に適するものがあるのではあるまいか」と述べて、中国の半殖民地化の起点となる阿片戦争という動乱を（1840～1842）靜かな月の古典詩文の世界と結びつけるのは矛盾で奇妙である。前に引用したところから、佐藤春夫の見解をさらに考えてみると、ここで重要なのは、近代中国知識人が抱える帰郷時の幻滅・絶望という「故郷」のテーマが童話の楽しい世界や唐代の漢詩の色彩にぬりかえられてしまったという点である。実際、佐藤春夫のこのような思想的傾向が1940年に刊行された「支那文学選」の編集に影を落としている。

『支那文学選』は日本の少年少女向けの中国文学の翻訳集である。魯迅の「故郷」は「故郷」から「ふるさと」という題名に変えられ、ほかの中国古典文学の作品とともに収録された。「解説」において、佐藤春夫は、次のように日本の若い世代に魯迅と「故郷」の面白さを伝えている。

これは魯迅といふ近代の支那が生んだ最も大きな文学者の書いた『故郷』といふ短い小説を年の若い皆さん方に読んでもらふために、途中の一節と最後の理窟つばいところなどを略して、二人の幼な友達の話だけを主にしたのです。魯迅はつい事變前まで生きてゐた人で、近代の支那に文學の種を蒔いて、それを立派に育てあげた大きな功勞のある、わが國でいへば森鷗外のやうなえらい人です。日本に來て勉強したこともあるので、大へん日本をよく理解し愛した人でした。作品は鷗外と漱石とのちやうど中間にあるやうなものでした。そのすぐれた作品は、イギリスやフランス、ロシヤなど廣く世界中に讀まれて、わが國にその完全な全集が譯し出されてゐます。何といつても近頃の支那では、たしかに第一流の人物でした。好んで子供のことを書いた人ですが、この話のなかでも、海濱の子供が都會の子供に自分の田舎のことを話して聞かせるところなど、大へんおもしろいではありませんか。ふるい習慣にも新しい理窟にも囚はれないで、人間同士がみな兄弟のやうに温かく楽しく生きたいといふ立派な理想を持つて、これを妨げる人々とよく戦つた、心から尊敬すべき作家でした。この短い作品にも、この精神の一片がおぼろげながら出てゐると思ひます。(24)

この引用で佐藤春夫が述べている魯迅と「故郷」の紹介には批判的な注釈が必要である。例えば、「ふるさと」を掲載した『支那文学選』に「農村の平和な夕暮れ」「町のお祭りに出た人形屋と少女たち」などの数枚の口絵がある。これらの少年少女の絵によって平和と快樂なメッセージを伝えている。しかし、『支那文学選』が刊行された日中戦争中の時代背景を念頭において考えてみれば、戦争の殘酷さを粉飾する意図が明らかである。また、この『支那文学選』の新訳文には改訳の部分が見られる。新訳を初出時の訳文や『魯迅選集』に収録された訳文と比較してみれば、それはあきらかになる。佐藤春夫の解説文からも窺えるが、原作においてよく知られる「希望の論理」に相当する最後の部分が省略されたのである。

さらに、それ以前の訳文になかった次のような注釈に相当する1節が訳文中に見られる。

（このあたりの軍閥、掠賊……などといふのは、みな近ごろの支那の内政をよく言ひ盡くしてゐるもので、悪い政治家と結託した軍人の仲間、いはゆる軍閥といふものを作者は大へん憎んでゐた。全く支那事變を引きおこしたのも、みなこの連中であつた。）⁽²⁵⁾

作中の「軍閥」という言葉について、佐藤春夫は括弧を用いて、「故郷」に出ている軍閥について「全く支那事變を引きおこしたのも、みなこの連中であつた」と説明を加えている。しかし、「故郷」の執筆背景を考えると、この名詞についての説明には大きな違和感がある。ここで魯迅が「故郷」を執筆した当時の中国の状況を振り返ってみる。

1911年に辛亥革命が起こり、中華民国が成立し、孫文は大統領になった。しかし、清朝側も袁世凱を総理大臣に立て、両者交渉の結果、皇帝退位の条件で袁世凱を大統領とすることになった。袁世凱が約束を違えて自分が皇帝になろうとしたために、再び混乱が起こり、孫文は日本に亡命した。その後、各地に軍閥政府が乱立し、混乱状態が続いていた。「故郷」における「軍閥」はこのような「軍閥」を指している。佐藤春夫の注釈における1937年の支那事変への言及は「故郷」の時代背景とはずれており、間違つた誘導である。これは、中国内部の軍閥混戦を日中戦争という異なつた歴史的・時代的背景に置き換える翻訳だと思われる。翻訳がどこの読者のために、何のためになのかということを考えると、「故郷」の改訳を通して、翻訳者の戦争協力の態度が見えてくる。この事実を歪曲したかのような佐藤春夫の文章には日中戦争期における彼の中国へのまなざしとナショナリズムの一面が現れていると結論してよいであろう。

第五節 おわりに

本稿では、異文化理解と受容のための翻訳と異なる同質文化的要素が含まれる日中中国人の翻訳を媒介とした交流のプロセスを明らかにすることを試みた。日中交流文化の歴史、ないし世界文学史のなかで、周氏兄弟と佐藤春夫のように、同時代作家の間に進化した「相互翻訳」は貴重な事例になるに違いない。この事例に注目することで、中国と日本の作家はかつて翻訳を通じて、お互いに学び、理解しようとした様相が見えてくる。同時に、西洋近代文明と東洋伝統文化の挟間で葛藤する日中の知識人たちの姿が浮かび上がってくる。

周作人は佐藤春夫の文学を翻訳することを通して、中国の伝統思想や古典文学を時代に即して変容させ、読み替えていく可能性を追究したといえるのであろう。中

国の伝統思想や古典文学を否定したり、排除したりしたのではなく、中国の新文学にふさわしい形で利用しようとした。中国の伝統思想に対する認識や古典文学に対する理解をもこうした「作家翻訳」によって、深めたといえる。

1936年に魯迅は世を去り、佐藤春夫と直接会うことはなかった。周作人は1938年5月、日本側が設定した「更生中国文化建设座談会」に出席・発言し、ようやく佐藤春夫と会えた。これは日中戦争に巻き込まれた二人の面会ともいえる。結果的には、かつて翻訳を媒介とした日中知識人の交流は、戦争を媒介とする交流となってしまったのである。

注

- (1) 日本語訳は芥川龍之介「佐藤春夫氏の事」（『新潮』1919年6月号）から引用したものである。

- (2) 『現代日本小説集』商務印書館、1923年、381頁。

谷崎潤一郎『『病める薔薇』の序文』（佐藤春夫『病める薔薇』天佑社、1918年）から引用したものである。

中国語原文は以下の通りである。

佐藤春夫（Sato Haruo）生於一八九二年，是現代的一個詩的小說家。芥川龍之介說：「佐藤春夫是詩人，……所以他的作品特色也在於詩的這一點上。佐藤的作品裏，並非沒有諷道德的，也不是沒有寓哲學的東西，但是裝點他的思想的常是一派的詩情。佐藤的詩情似乎與世間所謂世紀末的詩情。佐藤的詩情似乎與世間所謂世紀末的詩情最相近，纖婉而兼幽渺之趣。」

他的作品又充滿豐富的空想，可以說是一種特色。谷崎潤一郎替他的病的薔薇作序，曾說：「據我想來，只有生於空想的人纔有得為藝術家的資格。藝術家的空想無論怎樣的與自然相隔離，只要他總是在作者的頭裏活著動著的力，這空想也豈不是同自然界的現象一樣，是真實之一種麼？能將空想化為真實，這纔算是有了為藝術家而生活著的價值了。」

- (3) 『晨報』1921年7月10日、第7面、拙訳。

中国語原文は次の通りである。

佐藤春夫 一八九一年生、有「田園之憂鬱」一書最有名。這一篇係從小說集「阿絹與其兄弟」中譯出。篇中有不能了解的地方，承H・S君說明、甚為感謝。

- (4) 佐藤春夫「雉子の炙肉」『お絹とその兄弟』新潮社、1919年、114頁。

- (5) 佐藤春夫「雉子の炙肉」『お絹とその兄弟』前掲書、114～119頁。

- (6) 『定本 佐藤春夫全集』第25卷、臨川書店、2000年6月、458～463頁。

- (7) 胡適「文学改良芻議」（「文学改良芻議」）『新青年』第2卷第5号、1917年1月、拙訳。

- (8) 鄭振鐸「文芸叢談」(「文藝叢談」)『小説月報』第12巻第1号、1921年1月、4頁、拙訳。
- (9) 周作人「聖書と中国文学」(「聖經與中國文學」)『小説月報』第12巻第1号、1921年1月、1頁、拙訳。
- (10) ミカエル・ウスティノフ『翻訳—その歴史・理論・展望』服部雄一郎訳、白水社、2008年、12頁。
- (11)『周作人散文全集 第3巻』廣西師範大學、2009年、531頁、拙訳。
- (12)『現代日本小説集』前掲書、350頁。
- (13) 佐藤春夫「雉子の炙肉」『お絹とその兄弟』前掲書、114頁。
- (14)『新約聖書馬太伝』米国聖書会社、1912年、46～48頁。
- (15) 佐藤春夫「雉子の炙肉」『お絹とその兄弟』前掲書、114頁。
- (16)『現代日本小説集』前掲書、351頁。
- (17) 佐藤春夫「からもの因縁」『支那雑記』大道書房、1941年10月、1～14頁。
- (18)「魯迅の「故郷」や「孤独者」を訳したころ」『定本 佐藤春夫全集』第25巻、臨川書店、2000年、378頁。
- (19) 佐藤春夫「原作者に関する小記」『中央公論』(1932年1月号)
- (20) 佐藤春夫・増田渉訳『魯迅選集』岩波書店、1935年。
- (21)「魯迅の「故郷」や「孤独者」を訳したころ」前掲書、同頁。
- (22)「魯迅の「故郷」や「孤独者」を訳したころ」前掲書、同頁。
- (23) 佐藤春夫「魯迅文学入門指針」『大魯迅全集』月報第1号、改造社、1937年2月。
- (24) 佐藤春夫『支那文学選』新潮社、1940年、17頁。
- (25) 佐藤春夫『支那文学選』前掲書、15頁。